Ｎｏ．２２２【２０１６年８月１９日配信】
「人物史」の難しさ（担当：工藤）

こんにちは！　室長の工藤です。

ちょっと前のことですが、ある方から「人物の出てこない歴史は面白くない。だから、青森市の歴史はつまらない。」と言われたことがあります。たしかに、『新青森市史』の通史編を繰ってみたとき、多くの人物名は出てくるのですが、文学・芸術の分野を除くと残念ながら人物に焦点をあてた叙述はほとんどありません。

ただ、これは『新青森市史』に限ったことではなく、日本史一般に言えることのようです。例えば、『人物を読む日本中世史』（講談社選書メチエ　2006 年）という本をお書きになった本郷和人氏は、人物史は「科学としての歴史学から逸脱する危険をはらんでいる」と指摘し、戦前の皇国史観を排斥した戦後の歴史学界は、同時に人物史という手法も否定し、封印したといいます。皇国史観云々についてはここでは脇におくとしても、「お国自慢」的な叙述が幅を利かせたかつての郷土史においては、人物史は個人を顕彰するような叙述に陥りやすく、青森市の歴史叙述においても昭和 30 年～40 年代頃まではそういった傾向が少なからずあったように思います。そして、そこで得た評価は、現在でも一定の位置を占めています。

さて、歴史資料室では毎月 1 回、このメールマガジンを素材とした歴史講座「あおもり歴史トリビアを読む会」を開催しています。来月のテーマは「森山弥七郎と進藤庄兵衛―青森の町づくりに貢献した人たち」で、まさに人物に焦点を置いています。森山と進藤、このふたりの評価は、昭和 30 年（1965）刊行の『青森市史』人物編では、森山は「青森開港の恩人」、そして進藤は「無二の忠臣であり、（中略）津軽藩の大久保彦左衛門といわれた」とされ、いわば英雄的な存在として位置付けられています。特に進藤については、2 年前の生誕 400 年を契機に改めて彼の遺徳を顕彰する動きがみられるようになってきています。

森山弥七郎供養碑
（浄満寺）

進藤庄兵衛正次ゆかりの地の解説板
（廣田神社）

さきの本郷氏は続けます。人物史の「分析は実証的でなくてはならない。（中略）なぜそのように考察し、解釈するのか。証拠を明示しながら、他の人の検証に堪える人物解析が求められる」と。この指摘のように実証的な評価を行うと、結果として彼らの「英雄」像は崩れ、また彼らの気持ちを類推できないため、ドラマ性、面白味に欠けてしまうかもしれません。ただ、科学としての歴史学という前提に立つ以上は、憶測や感想にとらわれずに淡々と歴史的事実を積み上げていくしかない…そう考えて今から準備を始めます。実は、人物史とはなかなか難しいものなのです。